

石川病薬ニュース

石川県病院薬剤師会会報

令和8年(2026)/7.31発行 No. 192

CONTENTS

- ・巻頭言
- ・第76回 石川県病院薬剤師会定例総会
- ・学術研修会
- ・委員会報告
- ・他都道府県病薬会誌寄贈一覧
- ・南船北馬
- ・令和7年度石川県病院薬剤師会 会員名簿 正誤表



〔巻頭言〕

石川県の2040年を見据えた病院薬剤師の役割と共創

石川県病院薬剤師会 監事・金沢大学附属病院 薬剤部長 崔 吉道……1

〔第76回 石川県病院薬剤師会定例総会〕

総会報告	3
令和7年度 事業報告（中間）	5
令和7年度 石川県病院薬剤師会 後援事業並びに関連学会等	17
令和7年度 決算報告・会計監査報告	18
第8回石川県病院薬剤師会研究奨励賞	19
石川県病院薬剤師会 専門薬剤師等支援事業 助成申請者一覧	20
令和8年度 事業計画	21
令和8年度 予算書	22

〔学術研修会〕

令和7年度第1回（通算第175回）学術研修会 金沢医科大学病院 山本 康人……23

発表者報告

薬剤部人材確保に影響する要因の検討	金沢医科大学病院 飯田 滯……25
病棟薬剤師2人常駐体制による病棟薬剤業務拡大の効果	石川県済生会金沢病院 茶野下貴恵……27
アンチバイオグラムを活用した術後感染予防抗菌薬としてのクリンダマイシン処方の適切性に関する調査	金沢大学附属病院 清水菜々子……29
金沢医科大学病院における新人インシデント分析～新人教育に活かすには～	金沢医科大学病院 依田 幸子……31
骨粗鬆症薬物治療歴の管理	浅ノ川総合病院 重松 薫……33
ブリナツモマブの携帯型輸液ポンプを用いた在宅での治療継続への取り組みと課題	金沢大学附属病院 居林 優輝……35
術前SGLT-2阻害薬の休薬導入と経過	城北病院 横山 慶太……37

〔委員会報告〕

感染制御委員会	
第26回石川県感染制御セミナー開催報告	城北病院 濱 理恵……39
臨床実習委員会	
実務実習アップデート研修会2025	金沢大学附属病院 板井 進悟……41
総務委員会	
全身ジャージの挑戦 ―そして二度の屈辱―	金沢大学附属病院 島名 世南……43
がん治療委員会	
第43回がん薬物療法セミナー開催報告	芳珠記念病院 安藤 友貴……45
第44回がん薬物療法セミナーの開催報告	金沢医療センター 西山由紀子……46
精神科治療委員会	
令和7年度第2回精神科治療委員会研修会を終えて	金沢医科大学病院 清水 善仁……47
中小病院委員会	
第38回 中小病院薬剤師研修会報告	公立つるぎ病院 中川 恵三……49
NST委員会	
令和7年度 第1回NST委員会研修会報告	金沢赤十字病院 神田 菜摘……51

〔他都道府県病薬会誌寄贈一覧〕……52

〔南船北馬〕……53

〔令和7年度石川県病院薬剤師会 会員名簿 正誤表〕……54

〔編集後記〕

〔院瀬見 義弘先生の寄稿掲載終了のご案内〕

〔病薬ニュース発行欄〕

表紙写真 撮影

：熊走 尚志

主計町の夜景

表紙は主計町茶屋街。夏の浅ノ川園遊会、白糸川床を望む夜景。

裏表紙はチョウトンボ（蝶蜻蛉）、体長3～4cm、チョウのようにひらひらとした飛び方をする希少品種。

巻頭言

石川県の2040年を見据えた 病院薬剤師の役割と共創

石川県病院薬剤師会 監事・金沢大学附属病院 崔 吉 道

2040年に向けて、日本はこれまでに経験したことのない人口構造の変化に直面しています。高齢者のさらなる高齢化、生産年齢人口の急減、地域間格差の拡大、そして医療・介護需要の増大など、複合的かつ相互に関連する課題が顕在化しつつあります。このような中、医療提供体制の持続可能性を確保するためには、地域の実情に応じた医療体制の再構築と多職種の緊密な連携が不可欠です。そして、その中核に位置する存在の一つが病院薬剤師です。

中小病院は地域医療を支える重要な役割を担っています。しかしながら、薬剤師の偏在や人員不足により、日常業務の維持すら困難な施設も少なくありません。高度急性期病院への人材集中は全国的傾向であり、地方の中小病院においては新たな業務への対応どころか、基本的な薬剤業務の維持に苦慮している現状があります。しかし、こうした状況でこそ、病院薬剤師の専門性と創意工夫が強く求められます。

厚労科研安原班の調査で、薬学生の多くが急性期の基幹病院を志向する一方、将来的には回復期や慢性期の地域医療への貢献意欲をもつ学生も多数存在することが明らかとなっています。つまり、地域の中小病院においても、やりがいや成長機会を明確に提示できれば、将来の人材確保につながる可能性が十分にあるということです。その鍵となるのが、卒前・卒後教育の充実と、魅力ある研修環境の構築です。

石川県で進めている地域連携薬剤師共育プログラムは、その好例といえます。基幹病院と地域病院が連携し、一定期間の相互研修を通じて専門性を高めるこの取り組みは、薬剤師の育成と地域定着の両立を図るモデルとして注目されています。また、令和6年度の診療報酬改定においても、施設間連携や人材育成を評価する仕組みとして薬剤業務向上加算が新設されました。今後はこうした仕組みの効果をいかに地域全体に波及させていくかが焦点となります。

特に中小病院においては、「すべてを自施設で完結させる」という発想から脱却し、他施設との連携を前提とした薬剤業務の再設計が求められます。急性期から包括期、慢性期、さらには在宅医療へと続く医療の流れの中で、薬剤師が切れ目なく関与し、適切な薬物療法を支える体制の構築が重要です。そのためには、施設間での情報共有、標準化された業務プロセス、そして相互理解に基づく信頼関係の構築が不可欠です。

さらに、医療DXやICTの活用も今後の重要な鍵となります。電子的な情報連携により、患者の薬剤情報をシームレスに共有することで、地域全体の薬物療法の質を向上させることが可能となります。中

小病院においても、限られた資源の中で効果的にICTを活用する工夫が求められます。

病院薬剤師は今、「院内の専門職」から「地域をつなぐ専門職」へと進化する時代にあります。日々の実践で得られる知見を蓄積し、それを共有し、さらには学術的に検証することによって、新たな価値を創出していくことが期待されています。それは単に医療の質向上にとどまらず、地域社会そのものの持続性に寄与する取り組みでもあります。

石川県の病院薬剤師一人ひとりが、それぞれの現場で果たす役割は決して小さくありません。規模の大小にかかわらず、自施設の強みを生かしつつ、地域全体の医療を俯瞰した視点を持つことが重要です。施設の枠を越えた連携と共創により、地域に根ざした持続可能な医療体制を構築していくことが、これからの私たちに課せられた使命であると考えます。

本誌が、会員の皆様にとって日々の実践を振り返り、未来を展望する一助となれば幸いです。

